The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	帰国児童における第二言語としての日本語の磨滅 ：流暢さに注目して
Author(s)	金, 昴京
Citation	阪大日本語研究. 2010, 22, p. 91-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5289
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』22（2010）

帰国児童における第二言語としての日本語の摩滅
―流暢さに注目して―

L2 Japanese attrition of Korean returnee children: With a special focus on the change of the fluency

金　昴京
KIM Myokyung

キーワード：摩滅（attrition）、流暢さ（fluency）、帰国児童、第二言語としての日本語、韓国語母語話者

要旨

本稿は、韓国語母語話者の帰国児童３人を対象に、帰国後の第二言語としての日本語の摩滅の過程を観察し、流暢さに注目して分析を行ったものである。流暢さの指標として、フィラー、反復、言い淀み、自己修正を設定した。分析の結果、a）３人のインフォーマントにおいて、帰国後1年の間に摩滅が起こっていること、b）摩滅は時間が経つにつれ進行するが、６ヶ月まではある程度維持され、９ヶ月を過ぎると急激に変化すること、c）年齢が低いほど摩滅の進行が速いことの３点を明らかにし、d）摩滅の在り方として、retrieval failureの後にcompetence changeが続くという仮説を提示した。

１．はじめに

摩滅（attrition）とは、習得の逆のプロセスのことである。例えば、外国で生活してその国の言語を身につけた後帰国し、その言語を使わなくなることで、その言語を忘れていくことである。本研究は韓国語を母語とし、日本で生活する中で日本語を身につけた後、韓国へ帰国した子供３人（調査開始時９歳、７歳、５歳）を対象に、帰国後の時間の流れによる日本語の変化を観察し、その結果から帰国児童における日本語の摩滅の様相を明らかにすることを試みるものである。摩滅はさまざまな形で現れるが、本稿ではこれまでに行った６回の調査結果から、流暢さにおける変化についてまとめる。本稿の構成は、まず2節で調査の概要について述べたうえで、３節で流暢さについて述べる。４節で調査結果を示したうえで考察を行い、最後に５節で全体のまとめを行う。

2．調査概要

本研究は、時間の流れによるインフォーマントの日本語の運用能力の変化を観察し、変化の内容を分析し、その原因を考察するものである。Seliger & Vago（1996）は第二言語（以下、L2）・外国語（以下、FL）習得における普遍的で確立した段階はないため、摩滅の研究において信頼できる方法は、ある同じ個人の以前の状態と後の状態を比較し、その変化を見る縦断的方法のみであるとしている。この考えにしたがい、本研究でも日本に滞在した経験を持つ韓国語母語話者の子供３人（H、W、R）を対象に縦断調査を行う。帰国直前から帰国後１年間にわたって計６回調査を行っており、基本的に３ヶ月おきに調査を行った。３ヶ月というのは、インフォーマントに負担がかからない範囲で、かつ変化をたどるために離れすぎない間隔であると判断したうえでの設定である。以下では初回の調査を「Ⅰ期」、以降「Ⅱ期」、「Ⅲ期」…「Ⅵ期」と呼ぶ。なお、Ⅰ期は帰国直前、Ⅱ期以降が帰国後の調査となっており、帰国前であるⅠ期をベースラインデータとする。調査の内容は、大きく談話調査と面接調査、インフォーマントの保護者に対するインタビュー調査（インフォーマント情報に用いる）の３点である。このうち本稿では談話調査を中心に分析する。面接調査の結果については取り上げない。

2. 1. 調査方法

Yoshitomi（1999）では目に見えるような摩滅（喪失）が起こる前に現れうるのは、語彙、文法といった複数の項目を同時に操る必要がある実際の運用の場面におけるエラーや言い淀みなどであるとしている。本研究では、瞬時にいくつもの項目を運用する必要のある場面を設定するため、談話についての調査を行う。談話調査は日本語母語話者に協力してもらい、日本語母語話者とインフォーマント１対１の会話を基本とする。HとWのⅠ期のみKS[1)]、Ⅱ期以降の韓国での調査はIN[2)]に協力してもらう。

談話資料は自由談話と統制談話の２種類を収録する。自由談話では話題を制限せず、日本語母語話者と自由に話してもらう。統制談話では絵本（ストーリーの書いていないもの）を見ながら童話を話してもらう。使用する童話は、日韓両国で親しまれているものとして『シンデレラ』、日本の昔話として『桃太郎』の計２つである。本稿では、２種類の談話のうち統制談話の調査結果をまとめる。

2. 2. インフォーマント情報

インフォーマントは日本に滞在した経験を持つ韓国語母語話者の子供３人（H、W、R）

である。HとWは姉妹でRと両者間に面識はない。インフォーマントの保護者に対するインタビュー調査を参考に、以下2. 2. 1節でHとWについて、2. 2. 2節でRのインフォーマント情報を述べる。

2. 2. 1. HとW

HとWは帰国直前と1ヶ月後、その後約3ヶ月おきに計6回調査を行った。Ⅰ期は帰国前のベースラインデータである。ただ、Ⅲ期の調査はⅡ期の調査の約2ヶ月後であり、これは韓国語を使う機会が増えると思われる学校に入る前後に調査をすることで、環境の影響を調べるためである。

日本滞在中HとWの保護者は家庭内の使用言語を制限しておらず、姉妹同士[3)]で使用するのは日本語がほとんどではあったが、HとWはⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期までは韓国語・日本語両方を使っていた。筆者の調査時の印象や保護者とのインタビューから両言語の使用状況をみると、Ⅰ期は保護者や筆者に韓国語で話しかけられても日本語で答えるなど、ほとんど日本語であったが、Ⅱ期は日本語と韓国語が半々で、韓国語で話しかけられれば韓国語で答えていた。しかし、入学後のⅢ期にはほとんど韓国語メインでときどき日本語が混じる程度で、Ⅳ期以降は調査の間、インタビューを除いてはまったく日本語を使用するところが見られず、保護者とのインタビューやHとW本人の話からも、普段はもっぱら韓国語しか使用しないということだった。

現在、2人とも日本語の勉強は特にしておらず、保護者も現在の段階では日本語の維持よりも韓国での生活や学校の勉強を優先させるつもりであるという。HはⅢ期の調査時までは日本にいる友人とときどきメールで連絡をとっていたほか、日本語の本を読みたがるなど日本語に興味を持っていると思われたが、Ⅵ期以降の調査では韓国語の本の方が好きで、あまり日本語と接することはないとしていた。また、日本からの帰国児童の同級生がいるが、日本語で話すことはないという。

HとWは帰国児童クラスのある小学校に通っており、Ⅱ期からⅣ期の調査時まで約半年間在籍していた。ただし、このクラスは、国語、科学[4)]の時間にのみ、韓国の教科課程に慣れるまで別途の授業を行うもので、普段は一般のクラスで授業を受けていた。言語の維持を補助するクラスはない。Ⅴ期以降は全教科の授業を一般のクラスで受けている。詳細な居住歴、学習歴を表1に記す。

表１　インフォーマント情報（H，M）

年齢(H)	年齢(W)	滞在地	教育機関	備考
0-2	0-0;7	韓国		韓国語使用
2;1-4;6	0;8-3;1	横浜		韓国人の友人と韓国語使用
4;7-4;10	3;2-3;5	韓国	幼稚園	韓国語使用
4;11-5;1	3;6-3;8	大阪		家庭内では韓国語使用，友人とは日本語使用
5;2-5;6	3;9-4;1	韓国		韓国語使用
5;7-8;9	4;2-7;4	大阪	幼稚園後に小学校	日本人の友人ができ，日本語を話すように
8;10-8;11	7;5-7;6	韓国	入学前	日本語韓国語両方使用
8;11-	7;6-		初等学校（小学校）	約半年間帰国児童クラスに所属

※年齢の見方はｘ；ｙでｘ才ｙヶ月

2. 2. 2.　R

Rは帰国前のデータはなく、帰国直後に初回の調査を行っている。これをⅡ期とし、Rのベースラインデータとする。初回の調査時にはまだ保育園に入っていなかったが、直後に入園している。当初Rの保護者は家庭内の使用言語を日本語にすることで日本語を維持させたいと希望しており、Ⅱ期の調査時は日本語で話していたが、Ⅲ期以降は日本語で話しかけるとRが不機嫌になったり返事をしなかったりするようになったため、韓国語で話すようになったという。筆者から見ても、Ⅱ期は日本語でのみ話していたが、Ⅲ期以降は両親が日本語で話しかけても韓国語で答えるようになっていた。ただし、日本語モノリンガル（とRが思っている）人が同席の場合にのみ日本語で話すことがあるという。しかし、Ⅴ期になると日本語で話すことを恥ずかしがり、実際に調査でもコ系指示詞を使って現場指示的に話を進めたり、本を読んだりするなどして日本語の発話を避けた。Ⅵ期では最初調査を拒み、結局調査でも韓国語で話したり、質問に「分からない」と答えたりするなどほとんど日本語を話さなかった。保護者の話でも、Ⅳ期の調査の直前に日本から保育園での友人が遊びに来た時は、母親に「〇〇って日本語でなんて言うの？」と聞きに来ることが多かったが、自然に日本語で遊んでいたという。しかしⅥ期の直前に、日本語母語話者と接したときは、日本語母語話者は日本語で話し、Rは韓国語で話すというパターンで話していたということから、Ⅳ期からⅤ期の間に日本語の発話に対する苦手意識が芽生えてきたと思われる。保育園では入園直後は日本語も韓国語もまったく話さなかったが、２ヶ月過ぎたころ（Ⅲ期）から韓国語を話すようになり、以降家でも韓国語で話すようになったという。

Rの保護者は日本語の維持のため、日本から子供用の月刊学習誌を毎月取り寄せたり、日本のアニメを見せたり、Ⅴ期までは日本語の礼拝に出ることで週に１度日本語や日本語母語話者と接する機会を設けていた。R本人も日本の学習誌を楽しんでいるようすで、Ⅴ

期までは日本語の読み書きができ、アニメは繰り返し見たためセリフをほとんど覚えているほどだったが、Ⅵ期では日本語の読み書き能力が失われていた。

詳細な居住歴、学習歴の詳細は表２に記す。なお、Rは日本滞在中から帰国後も保育園に通っており、保育園は現地の一般の保育園であるため使用言語は現地の言語となる。表の「備考」欄には、家庭内での使用言語について記した。

表２　インフォーマント情報（R）

年齢	滞在地	教育機関	備考
0;7-4;3	東京	保育園	家庭内で韓国語使用
4;4-4;5	韓国		韓国語
4;6-4;10	東京	保育園	家庭内で韓国語使用
4;11-5;0	韓国		家庭内で日本語使用
5;0-5;2		保育園	
5;2-			家庭内で韓国語使用

※年齢の見方はｘ；ｙでｘ才ｙヶ月

３．流暢さ

話しことばはリアルタイムに自分の考えを音声によって相手に伝えるものである。したがって、話し手は何を、どの順番で、どの形式で発話すればよいかを発話中にリアルタイムに決定する必要があり（Levelt 1989）、さらに発話される内容は明瞭な発音や的確な統語構造を備えていることが求められる。このような制約が話者にとって負荷となるため非流暢現象が生じるとされている（丸山2008）。以上は母語話者における非流暢現象の発生要因であるが、摩滅の研究においても流暢さは注目されており、Yoshitomi（1999）では言い淀みやエラーなどの非流暢現象の理由は、実際の運用の場面（発話）で必要となる語彙、文法といった複数の項目を同時に操るコントロールが行き届かなくなるためであるとしている。またHansen（2001）では、最初に現れるのは特定の項目の摩滅ではなく思い出すのにかかる時間が長くなることであるとしており、いずれも「流暢さ」において早い時期に摩滅の影響が現れることを指摘している。これらの先行研究から、非流暢現象は発話時において話者が言語に関する知識に瞬時にアクセスすることができない、すなわち知識へのアクセスが困難になっているために現れる、パフォーマンスにおける摩滅の現象であることが分かる。したがって本稿では、インフォーマントが摩滅の初期段階にあることから、非流暢現象に焦点をおき分析を試みる。

流暢さについてYukawa（1998）では「スムーズで自動化された言語（知識）の運用」と定義している。この流暢さを阻害されたことを示す指標は研究者によって異なり、たと

えばフィラー（filler）、休止（pause）、反復（repetition）、自己修正（self-repair）などが用いられている（Yukawa 1998、Tomiyama 1999、Yoshitomi 1999、Hirai 2002）。本稿では、これらの指標の中から、カウントが困難な休止を除いたフィラー、反復、言い淀み、自己修正に注目して調査結果を述べ、その発生要因について考えることで、摩滅のあり方を探っていきたい。これまでの研究では、このような指標の出現回数や休止の時間数を示すにとどまっており、どのようなところで、どのような形で現れたのかについては言及されていない。本稿ではこれらの指標の現れる位置や形を分析することで「何が思い出せないのか、思いだしにくいのか」といった問題についても考えてみたい。

４．調査結果

本稿では、非流暢現象をフィラー（4.１節）、反復（4.２節）、言い淀み（4.３節）、自己修正（4.４節）に分類し、結果を述べていく。分析においては、出現数に注目して変化を見ていくため、３人のインフォーマントの発話量の変化も重要となる。本稿では、発話量として内容語の数を用いることとし、その異なり語数と延べ総数を表３にまとめた。表の「シ」は『シンデレラ』を、「桃」は『桃太郎』を指す。

この表から以下のようなことが分かる。HはⅠ期とⅡ期でほとんど発話量が変わらず、Ⅲ期で増え、Ⅳ期で減少し、Ⅴ期からⅥ期にかけて増えている。WはⅠ期でもっとも発話量が少なく、Ⅱ期、Ⅲ期と増加し、Ⅳ期で減少したのちにⅤ期からⅥ期にかけて増加している。次に、RはⅡ期からⅢ期、Ⅳ期と増加したが、Ⅴ期からⅥ期へと減少し、Ⅵ期ではⅡ期よりも少ない数となっている。ただ、RのⅤ期での桃太郎の語りについては、本を読んでいるものであるため、他のデータとの均質性に欠けているものであるが、本を読んだということは、自発的な語りに困難を感じているということの表れでもあり、続くⅥ期に発話量が大きく減少したことからも、Rの摩滅が進んでいることが分かる。

まず、３人に共通して初回の調査の発話量が少なく、以降増えていることについては、調査に対する学習効果が考えられる。同じテキストに関する語りを繰り返すことで、より具体的に説明することができるようになることは十分考えられる。

もうひとつは、最初は自分の意図を簡潔にまとめて表現できていたものが、時間がたつにつれ、自分の意図とそれに適した言葉を結びつけることができず、冗長になっている可能性である。この可能性については、稿を改めたい。

いずれにしても、学習効果がある中での非流暢現象というのは、日本語での情報処理に困難を感じているということの現れであり、摩滅の現れであるといえるだろう。

表３　発話データの異なり語数と延べ語数[5)]

			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
H	シ	異	52	51	86	59	71	89
		総	82	89	180	112	145	217
	TTR		0.63	0.57	0.48	0.53	0.49	0.41
	桃	異	57	54	97	65	83	88
		総	97	92	206	135	191	207
	TTR		0.59	0.59	0.47	0.48	0.43	0.43
W	シ	異	24	51	83	72	91	32
		総	31	87	142	148	261	95
	TTR		0.77	0.59	0.58	0.49	0.35	0.34
	桃	異	42	71	93	78	77	53
		総	67	162	211	172	249	158
	TTR		0.63	0.44	0.44	0.45	0.31	0.34
R	シ	異		38	68	61	46	13
		総		73	202	154	119	25
	TTR			0.52	0.34	0.4	0.39	0.52
	桃	異		36	46	42	58	12
		総		49	91	75	92	13
	TTR			0.73	0.51	0.56	0.63	0.92

4. 1.　フィラー

山根（2002）では、フィラーについて「それ自身命題を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にない、発話の一部分を埋める音声現象」と定義し、その現れ方によって11種類に分けている。山根（2002）でも、上記３種の機能の区別にかかわらず、フィラーの頻度が高いことは「テキスト構成に関わる機能」、「対人関係に関わる機能」、「話し手の情報を処理する機能」の３つに分類でき、話し手にとって自分の発話をモニターし、発話を軌道に乗せたり修正したりするのに役立つとしている。しかし、実際の発話データからその機能を明確に分類することは非常に困難であること、そして山根（2002）でもフィラーの頻度が高いことは情報処理能力が乏しいことを示すとしていることから、本稿ではフィラーの出現数の変化のみに注目し、機能別の分類は行わないこととする。

３人の実際の談話データから使用されたのは「あー系」「うーん系」「えーと系」「なんか」の４形式であり、以下具体例とその出現数を表４、表５、表６にまとめる（グラフの縦軸は実数。「日」は日本語の４形式をまとめたもの）。また、Ⅲ期以降、山根（2002）の前掲の定義に当てはまるような韓国語のフィラー[6)]の使用が見られるため、こちらも「韓」として出現数を示す。

（１）あーなんかー王子様のー　【H・Ⅰ期】

（2）えーっとなんかーシンデレラのお父さん死んじゃってー　【H・Ⅰ期】
（3）うーん、やられてる。　【W・Ⅰ期】
（4）馬をーなんかこうやって鞭で叩く人とかー　【H・Ⅰ期】

表4　フィラーの出現数（H）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
あー	1	0	0	0	0	0
うーん	0	0	11	0	2	0
えっと	17	14	26	0	1	0
なんか	6	2	20	3	11	4
韓国語	0	0	0	11	9	46

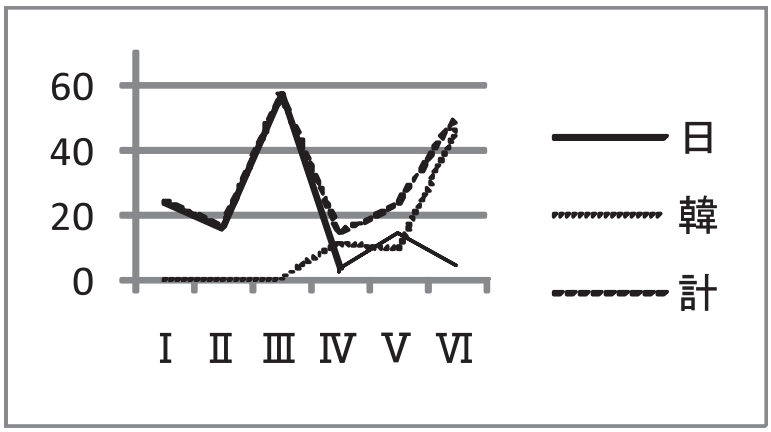


表5　フィラーの出現数（W）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
あー	1	0	0	0	0	0
うーん	6	5	24	18	9	0
えっと	1	3	1	0	0	0
なんか	0	1	11	0	1	0
韓国語	0	0	0	14	22	63

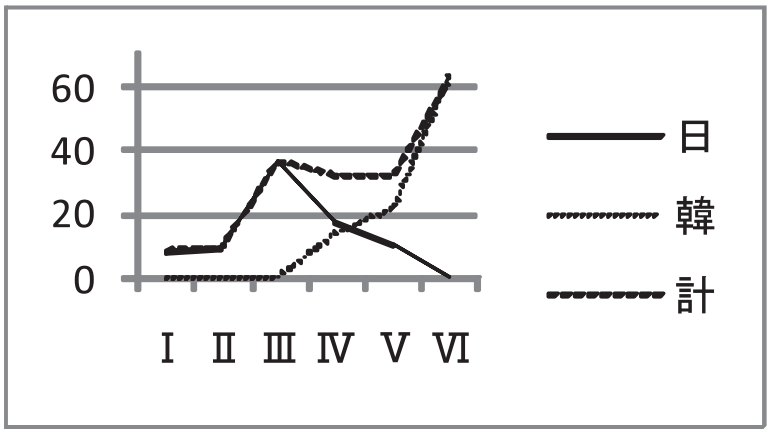
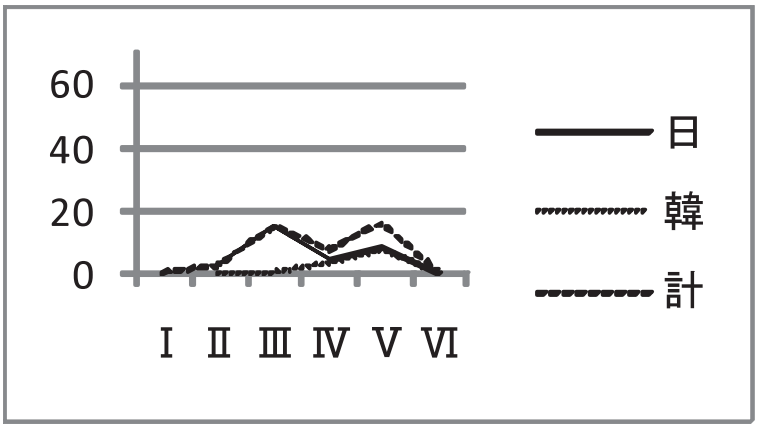


表６　フィラーの出現数（R）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
あー		1	1	0	2	0
うーん		1	6	4	6	0
えっと		0	8	0	1	0
なんか		0	0	0	0	0
韓国語		0	0	3	7	0



調査結果をみると、インフォーマントによって少し傾向が異なることが分かる。

まず、Hはフィラーの出現数がⅡ期で最も少なく、Ⅲ期で急増した後、Ⅳ期で減少、以降増加している。次に、WはⅠ期で最も少なく、Ⅱ期からⅥ期まで階段式に増加している。Rは３人の中で出現数が最も少ないが、これはRの発話の多くが短文であることによる。また、Ⅲ期とⅤ期で最も出現数が多いM字型になっているが、Ⅵ期でRはほとんど発話をしていないことによる。

一方、３人に共通している点を見ると、まず、使用されたフィラーがⅢ期までは日本語のもののみであったのが、Ⅳ期では韓国語のフィラーの使用が見られ、Ⅴ期、Ⅵ期に渡って両言語のフィラーが併用されつつ韓国語のフィラーに一本化していく様子が見られる。そして、HとWに限って言えば、Ⅲ期でフィラーの出現数が急増している。

Ⅲ期でフィラーが急増した要因として、環境の変化による韓国語能力の上達が考えられる。Ⅱ期の調査は、インフォーマントが帰国し韓国の学校へ入学する直前のデータであり、Ⅲ期は入学から３ヶ月目となる時点である。その間、学校生活を通じて韓国語との接触が増え、韓国語での生活を送る中でインフォーマントは韓国語がだいぶ上達しており[7)]、一方で日本語に接する機会がほとんどなかった。そんな中、突然日本語の使用を強いられ、普段と違う言語で話すというプロセスに戸惑いを感じた結果現れたものと思われる。そして、Ⅳ期ではⅢ期での被調査経験から慣れが生じ、そのような戸惑いがなくなったため減

少したと思われる。

フィラーが情報処理の過程で現れるものであることを考えると、フィラーの増加は情報処理の効率が低下しているということを意味する。HとWのⅢ期での変化は、普段の使用言語と異なる言語での会話という慣れないタスクであるために起こった情報処理の非効率化と考えられる。さらに、韓国語のフィラーと日本語のフィラーの合計の数は、Ⅳ期でいったん減少した後、Ⅴ期、Ⅵ期と増加している。このことから、帰国後時間がたつにつれ、日本語での情報処理の非効率化が進んでいると考えられる。ここでの情報の非効率化は、Levelt（1989）の発話モデルを借用すれば、具体的な言葉に表す段階であるmicro-planningの段階におけるものである。この段階で日本語と韓国語が拮抗していることで、情報の処理が非効率的になり、その結果フィラーが増える。さらに、Ⅳ期以降、韓国語でのフィラーが現れたことは、情報処理の際、韓国語の方が優勢に働き始めている結果と考えられる。韓国語の使用はフィラーに限らず、語彙（例文（５））や助詞（例文（６））についても現れている。

（５）おじいさんはーいつもどおりに山へ行ってー、なんかー、나무（na.mwu.／木）を切ってくる、ことをしてー、【H・Ⅴ期】

（６）桃太郎はー旗와－（wa.／と）、服와－（wa.／と）旗와－（wa.／と）服와－（wa.／と）음－（um.／フィラー）……きび団子を持ってー음（um.／フィラー）鬼退治に行きました。【W・Ⅵ期】

以上の結果から、Ⅳ期前後に韓国語が優勢になり始め、その結果、時間がⅤ期以降日本語での情報処理に時間がかかるようになる、すなわち摩滅が起こっていると言えるだろう。

4. 2. 反復

反復とは、強調など特別な目的を持たず、一度発話した内容を繰り返すことを指す。

（７）あ、包丁を持ってーそれでー…切ろうー切って、切ったんだけどー…切ったんだけどーその中から桃太郎（後略）[8]【H・Ⅵ期】

（８）おばあさんがー洗濯をしているときー、大きい大きい桃がー…【W・Ⅵ期】

（７）では、「切る」の活用形が「切ろう」、「切って」、「切ったんだけど」と羅列されており、意図した形式を見つけるために検索していることが分かるが（８）の場合前後に迷った形跡もなく、「大きい」ということを強調する目的の反復であることが分かる。ここでは（８）のような意図的な反復であるか否かは音声の言い淀みやポーズなどから判断し、意

図的な反復と判断された例は考察の対象から省く。表７に非意図的な、非流暢さを反映する反復の出現数をまとめる。

表７　反復の出現数（H，W，R）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
H	6	1	10	12	26	32
W	1	8	1	3	14	23
R	−	0	7	1	1	0

表７では区別していないが、反復は、大きく２つの機能で使われている。１つは、（７）のように前に活用や語彙の自己修正が現れ、意図した形式を発見したときに自己確認として現れることが多い。もう１つは、次のテキストを構成するためにかかる時間を埋めるための、フィラーのようなもので、実際に現れた例として（９）を挙げる。

（９）それでー船を作ってー、船を作って桃太郎と仲間たちが一緒に鬼ヶ島にー、行くまでー음－（um.[9]／フィラー）嵐とかーそんなの…음－（um.／フィラー）어－（e.／フィラー）嵐とかー吹いてたのにー　【H・Ⅵ期】

表７によってインフォーマント別に傾向を見てみると、HはⅡ期以降増加しており、WはⅣ期まで増減を繰り返し、以降増加しているが、両者ともⅤ期以降急激に増加している。RはⅢ期でピークを迎えたのちに激減しているが、これはⅤ期以降Rの発話量が減ったためである。

4. 3.　言い淀み

言い淀みは、何らかの理由で一度に言えず迷いが見られたもので、Yukawa（1998）では、文節以下のレベルで起こったもの（intra-constituent pauses）のみを対象とし、その出現数の増減から流暢さを図っている。しかし、本稿ではそれに加えて、インフォーマントがどのようなところで困難を感じたのかを明らかにするため、さらに生起環境も分析の対象とする。分類にあたっては、インフォーマントの発話に現れた言い淀みをもとに、その現れ方から語頭に付加されるもの（A）、語中で現れるもの（B）、文節内で現れるもの（C）の３つに分けたうえで、下位分類を行った。このような下位分類を行ったのは、何が思い出せないのかを考えることで、言い淀みの発生要因を探るためである。以下、具体的な分類を実際の用例とともに述べる。なお、例文の「、」は３秒未満の沈黙を表し、言い淀みの箇所であることを示す。

A：語頭[10)]

A-1：非活用語―体言の最初の音を繰り返したもの

（10）お、鬼ヶ島　【W・Ⅰ期】

A-2：活用語①―用言の語幹内を繰り返したもの

（11）あ、あたらしい　【W・Ⅴ期】

A-3：活用語②―用言の活用の直前までを繰り返したもの

（12）い、行きたくて　【H・Ⅱ期】

B：語中―語中で現れた言い淀みである。語頭での言い淀みのように繰り返すのではなく、語中で言い淀む形で現れるものもある。

B-1：体言

（13）お、にが　【W・Ⅲ期】

B-2：用言の語幹内

（14）つっ、つ、いてー　【W・Ⅳ期】

B-3：用言の活用部

（15）一緒に食べ、る　【H・Ⅲ期】

C：文節内―文節内で現れ、何らかの切れ目で現れている。

C-1：接尾語の前

（16）お姉ちゃん、たちー　【W・Ⅵ期】

C-2：助詞の前

（17）ネズミ、をー　【W・Ⅲ期】

C-3：助詞の後

（18）신데렐라（sin.dei.leil.la／シンデレラ）と、とー신데렐라（sin.dei.leil.la）が　【R・Ⅳ期】

C-4：形式名詞の前

（19）二人のー、ことー　【W・Ⅲ期】

C-5：アスペクト

（20）妖精がーなんで泣いて、いるかー　【W・Ⅵ期】

C-6：コピュラの前

（21）誰のもの、だ　【W・Ⅵ期】

C-7：その他

（22）ままたち死んで、ってー　【R・Ⅳ期】

（23）こうやってやって、んだ。　【R・Ⅳ期】

D：中途終了

（24）おじいさんは山にー…。　【W・Ⅲ期】

次に、各インフォーマントの言い淀みの出現数を表８、表９、表10にまとめる。

表８　言い淀みの出現数（H）

				Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
H	語頭に付加	非活用	①				1	3	3
			②				1	1	
		活用	①		1	2	1	2	
			②			1		1	
	語中	体言				1			1
		用言の語幹							
		用言の活用部				4	1		2
	節内	接尾語の前							1
		助詞の前					3	5	7
		助詞の後							
		形式名詞の前						1	1
		アスペクト							1
		コピュラの前							1
		その他					3	1	
	中途終了文						1		3
	小計			0	1	8	11	14	20

表９　言い淀みの出現数（W）

				Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
W	語頭に付加	非活用	①	1	3	4	2	16	22
			②		2			2	
		活用	①			3	4	2	2
			②						
	語中	体言				3	4	3	2
		用言の語幹					3	2	
		用言の活用部			1	1	1	2	
	節内	接尾語の前							1
		助詞の前				3	8	11	10
		助詞の後					1		
		形式名詞の前				1			
		アスペクト					1	6	
		コピュラの前							1
		その他							1
	中途終了文						9	10	41
	小計			1	6	15	33	54	80

表 10　言い淀みの出現数（R）

				Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
R	語頭に付加	非活用	①			1	1	1	
			②			2		2	
		活用	①				1		
			②						
	語中	体言					2	1	
		用言の語幹							
		用言の活用部							
	節内	接尾語の前							
		助詞の前					2		
		助詞の後					1		
		形式名詞の前							
		アスペクト							
		コピュラの前					1		
		その他				1	3		
	中途終了文						6	11	1
	小計				0	4	17	15	0

上記のように分類した結果、3人に共通してⅢ期から出現数が急増するとともに生起環境が多様化していることが分かる。初出の時期はインフォーマントによって異なるが（HはⅡ期、WはⅠ期、RはⅢ期）、言い淀みが出現した初期は、語頭に付加される形で現れ、次に語中で、そして語末で現れ中途終了文が現れる形で進んでいる。

上記分類の各項目における言い淀みの発生要因を考えてみると、語頭に付加される非活用と活用①、体言、用言の語幹など、形式が決まっているものは語形の検索、活用②、用言の活用部、アスペクトは活用、その他は語彙の検索のために現れたと考えられる。特に中途終了文の場合、思い出せない単語や活用形について聞き手に助けを求める消極的な単語の補充要求として使われている。

（25）W：き…。
　　IN：切ると　　【W・Ⅴ期】

（26）W：切ると一中からー…小さい男の、子がー…。
　　IN：出てきました。
　　W：出てきました。　　【W・Ⅴ期】

中途終了は3人ともⅣ期に初出していることから、Ⅳ期（帰国から6カ月前後）になると語彙の検索能力において年齢にかかわらず変化が現れやすい時期である可能性がある。

言い淀みは、初期は語頭に付加される形が中心で、ミステイクとも考えられるものであったが、次第に活用や助詞など選択の必要性があるところで現れ、後には検索に失敗する

ケースも見られるという形で進むと考えられる。このことから、言い淀みは帰国後韓国語が優勢になるにつれ、日本語が優勢な時期は意識することのなかった活用や助詞などの切れ目で、瞬時に意図した語を産出することができず、現れた結果ではないかと考えられる。さらには、言い淀みで検索時間をかけても結局思い出せないケースも現れるのがⅥ期である。

インフォーマント別にみるとHは出現数は増えているものの、変化が緩やかであることから、3人の中では比較的安定している。Wは3人のうち最も早く変化が現れ、それぞれの段階で数としても最も多く、特にⅣ期以降中途終了文が増えていることから、検索能力にかなり変化が生じていると思われる。最後にRは、変化が現れるのはWより遅かったが、Ⅴ期とⅥ期の間に急激に変化している。これらの結果から、摩滅において年齢が高いほど維持しやすいという先行研究（Yukawa 1998）での仮説を支持することができる。ただ、Rの変化が現れるのが遅かったことから、家庭内での使用言語の制限（Rの場合、保護者が家庭内では日本語のみを使用）は摩滅を遅らせるために、ある程度効果があると思われる。

4. 4. 自己修正（self-repair）

自己修正についてYoshitomi（1999）では、「前の発話（original utterances）の一部を含む修正」と定義しており、「前の発話を含まず他の表現に置き換える修正」についてはfalse-startsと区別している。しかし本稿では、「どのような位置でなぜ修正をおこなったのか」ということの分析に焦点を置くため、両者を区別せず修正が加えられたものはすべて自己修正として扱うことにする。また、単語レベルだけでなく節レベルでの修正も含める。

以上の定義にしたがいⅢ期までに現れた自己修正を取りだし、表現の修正、的確な修正と不的確な修正に分け、修正のなされた部分によってさらに下位分類をした。以下具体的な分類を実際の例文とともに記す。

A：表現の修正―修正しなくても文法的に問題なし

A-1：情報付加

（27）お姉ちゃんたち、新しいお姉ちゃんたち　【H・Ⅲ期】

A-2：他の表現への修正

（28）ガラスの靴、ガラスのーハイヒール？、ガラスの靴　【H・Ⅲ期】

B：的確な修正―修正が必要な文で、かつ行われた修正が的確

B-1：格助詞

（29）出られたシンデレラにーシンデレラがー王子様の目にとまってー　【H・Ⅲ期】

B-2：接続助詞

（30）いっぱい食べたからー、いっぱい食べてー、もりもりなんかー…よくー大きくなったらー[11]、　【H・Ⅴ期】

B-3：活用

（31）急いで帰ったーえー帰って、それでぼろい、また服に戻った。　【H・Ⅲ期】

B-4：語形

（32）き、み、きび団子　【W・Ⅲ期】

B-5：存在動詞

（33）鬼がな、いないか　【W・Ⅲ期】

B-6：語彙

（34）おばあちゃんとおにいちゃん、あ、おばあちゃんとねーおじいちゃん[12]がね　【R・Ⅲ期】

B-7：韓国語的な表現から日本語の表現へ

（35）よくー大きくなったらー、子供になったらー、　【H・Ⅴ期】

B-8：韓国語から日本語へ

（36）町の사람（sa.lam.／人）、町の人たちにー…　【H・Ⅵ期】

B-9：その他：

（37）洗た、くーをしていーそれ…え？うん、そしてたらー[13]　【H・Ⅲ期】

C：不的確な修正―修正が必要な文で、行われた修正が不的確

C-1：表現

（38）ナイフ？剣　【H・Ⅲ期】

C-2：格助詞

（39）王子様のー王子様がー王子様のー結婚相手を選ぶ…　【H・Ⅴ期】

C-3：活用

（40）洗濯ーし、して、い、していた、してい、い、い…。　【W・Ⅴ期】

C-4：語形

（41）ふねー…なんかふな　【H・Ⅲ期】

C-5：表現

（42）お姉さんーたちがー行くのー行くのだけみて　【H・Ⅵ期】

C-6：韓国語から韓国語へ

（43）桃太郎한（han.）、에게（ei.kei.／に）…。　【Ⅳ・Ⅵ期】

次に、Ⅰ期からⅥ期の自己修正の出現数を表11、表12、表13にまとめる。

表 11　自己修正の出現数（H）

			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
H	表現	情報付加			3	3	3	8
		他の表現			3	3	4	5
	的確	格助詞			2	4	4	3
		接続助詞					3	2
		活用			1			5
		語形				1	2	2
		存在動詞						1
		語彙					2	1
		韓表→日表					1	
		韓→日					1	1
		その他			1	1		1
	不的確	表現			1			
		格助詞					1	
		活用					1	4
		語形			2			
		表現						1
		韓→韓						
	小計		0	0	13	12	24	34

表 12　自己修正の出現数（W）

			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
W	表現	情報付加			3	2	2	3
		他の表現		2	3	4	3	6
	的確	格助詞		1	1	1	4	8
		接続助詞					4	1
		活用				1	10	5
		語形			3		3	1
		存在動詞			1			
		語彙		1			2	
		韓表→日表						
		韓→日						1
		その他			1			
	不的確	表現						
		格助詞						
		活用					4	4
		語形				1		
		表現						
		韓→韓						1
	小計		0	4	12	9	34	30

表 13　自己修正の出現数（R）

			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
R	表現	情報付加				1		
		他の表現				1		
	的確	格助詞			2	1		
		接続助詞					1	
		活用						
		語形			2	3	2	
		存在動詞						
		語彙			1			
		韓表→日表						
		韓→日						
		その他				1		
	不的確	表現						
		格助詞						
		活用						
		語形				1		
		表現						
		韓→韓						
	小計			0	5	8	3	0

表から分かるように、自己修正は言い淀みと同様、活用や格助詞、接続助詞など選択の必要性があるところで多く現れており、前後にフィラーや休止をともなったり、上昇イントネーションが現れたりすることが多い。すなわち、自己修正は意図した語を発話の瞬間に思い出せず、検索に時間がかかり、他の語や語形を発話したために現れたものであると考えられる。

３人に共通しているのは、Ⅲ期に語の修正や語形の修正が見られ、同時期に誤用となりうる部分に対する修正が行われ、Hの場合は的確な修正に失敗した例も見られることである。WはⅣ期で不的確な修正を行っており、両者ともⅤ期、Ⅵ期と時間の流れによって時間がたつにつれ不的確な修正が増えている。このことから、Ⅲ期から「具体的に思い出す」ということに困難を感じはじめ、以降自己修正の出現数が徐々に増えていることから、摩滅が進行していると思われる。Rはもともと発話そのものが短いため、自己修正の数も少なかったが、Ⅳ期をピークにⅤ期以降ゼロに近くなっている。Ⅴ期以降の激減は、発話そのものが減ったためである。

一方、Ⅴ期からは韓国語的な表現や韓国語からの修正など韓国語の影響が現れている。Ⅵ期には韓国語的な表現への不的確な修正や、韓国語内での修正を行っていることから、この時期に確実に韓国語が優勢になっていると考えられる。

4. 5. 考察

最後に、これまで述べてきた結果から、摩滅のプロセスについて考えてみたい。

まず、Ⅰ期（RはⅡ期）の段階では、インフォーマントにとって優勢な言語は日本語であったことから、日本語は「自動化（McLaughlin et al. 1983）」された知識として存在していたと考えられる。帰国後、日本語との接触がなくなり、韓国語との接触が増えたことで日本語の知識の自動化が解除される。そのため、日本語の発話の際、知識の検索に時間がかかるようになるのであるが、早い時期（摩滅の進行が３人の中で一番早いRのⅢ期からⅤ期）は自己修正（4. 4節）で的確に修正し、言い淀み（4. 3節）、フィラー（4. 1節）で時間をかければ思い出せたのが、次第に時間をかけても思い出せなくなる（中途終了文、不的確な修正・RのⅣ期以降）。自力で思い出せなくなった時点でも、ヒントが与えられれば思い出せる段階（母語話者の援助を受けて自己修正を行う）から、聞いても分からない（母語話者の援助を受けた後の不的確な修正や中途終了文）という段階（RのⅥ期）が想定できるだろう（(44) 参照）。

(44) IN：おばあちゃん食べるのかな？
R ：うーん。
IN：切ってみたらどうなった？
R ：…。
IN：おじいさんなんだろうこれ？どうするんだろう？
R ：桃太郎。　【R・Ⅵ期】

摩滅の研究では、摩滅が起こった知識について、「検索に失敗しただけで知識は残っている（retrieval failure）」とする説と、「知識そのものが変形している（competence change）」とする説がある（Sharwoodsmith 1983）。上述のプロセスにおける、自動化の解除からヒントが与えられれば思い出せる段階までがretrieval failureで、聞いても分からないという段階がcompetence changeにあたるとすれば、retrieval failureの段階を経てcompetence changeが起こるという仮説がたてられる。

これらの変化は、知識全体において一気に起こるのではなく（4. 3節、4. 4節）、時間の流れとともに起こり、個人差もあると思われる。Ⅴ期以降Rの発話量が減ったことや、HとWの各指標の変化を比べた時、Hの方が安定的に推移していることから、年齢が低いほど、起こりやすく、変化も早いと思われる。

5．まとめ

以上、フィラー、反復、言い淀み、自己修正の出現数と生起環境から流暢さの変化について考察を行い、以下のようなことを指摘した。

（a）情報処理能力と関係があるこれらの指標の出現数が増えたことから、3人のインフォーマントに摩滅が起こっている。

（b）摩滅は時間がたつにつれ進行するが、6ヶ月前後まではある程度維持され、9ヶ月前後を過ぎると急激に変化する。

（c）年齢が低いほど摩滅が起こる時期が早く、摩滅の進行が速い。

（d）摩滅のあり方としては、retrieval failure の後にcompetence changeが続く

注

1）KS（女性／24才）居住歴（0-3：横浜、4-18：静岡、19-：大阪）

2）IN（女性／27才）居住歴（0-17：愛知、18-25：大阪、27-：ソウル）

3）末っ子の弟がおり、3人姉弟。

4）日本の理科にあたる。

5）TTR（Type Token Ratio）は異なり語数／延べ語数で，数字が大きいほど多様な語彙が使用されたことを意味する。

6）実際に使用されたのは以下の2形式であり、本稿では韓国語のフィラーとして一括した。

（a）でもーそこにー어－（e.／フィラー）……음（um.／フィラー）…絵？鬼の絵がー…いたんだけ、あったんだけどー　【H・Ⅵ期】

7）『シンデレラ』の韓国語での語りのデータから筆者が判断した。

8）（7）あ、包丁を持って―それでー…切ろうー①切って、②切ったんだけどー…③切ったんだけどーその中から…

で見ると、①は自己修正、②自己修正、③反復となる。

9）Yale式。

10）活用語①とは活用のある語で活用と無関係な部分で言い淀みが現れたもの、活用語②とは活用のある語で活用の直前など、活用と関係のある部分で言い淀みが現れたものを指す。

11）「すくすく育って」、「元気に育って」に相当する韓国語の表現「잘（jal.／よく）커서（ke.se.／大きくなって））」からのトランスファーと思われる。

12）「おにいちゃん」から「おじいちゃん」へ修正。

13）「そうしていたら」の意。中途終了したり対話者の援助を得ず、自力で発話を続けたので的確な修正とみなす。

参考文献

丸山岳彦（2008）「『日本語話し言葉コーパス』に基づく言い直し表現の機能的分析」『日本語文法』8-2: 121-139.

山根智恵（2002）『現代日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版.

Hansen,L.（2001）Language Attrition : The Fate of the Start. *Annual Review of Applied Linguistics* 21: 60-73.

Hirai,S.（2002）Longitudinal L2 Attrition: A Case Study of Japanese-English Bilingual Child. *Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism* 8-1: 26-57.

Levelt,W.（1989）*Speaking: From Intention to Articulation*. Massachusetts, The MIT Press.

Mclaughlin,B.& Rossman,T.& Mcleod,B.（1983）Second Language Learning: An Information-Processing Perspective. *Language Learning* 33-2: 135-158.

Seliger,H.W. & Vago,R.M.（1996）*First Language Acquisition*. New York, Cambridge University Press.

Sharwood Smith,M.（1983）On First Language Loss in the Second Language Acquierer : Problems of Transfer. In S. Gass, & Selinker,L.（eds.）*Language Transfer in Language Learning*. *Series on Issues in Second Language Research*. Rowley,MA:Newbury House.

Tomiyama,M.（1999）The First Stage of Second Language Attrition: A Case Study of a Japanese Returnee. In L.Hansen（ed.）*Second Language Attrition in Japanese Context*. New York, Oxford University Press, 59-79.

Yoshitomi,A.（1999）On The Loss of English as a Second Language by Japanese Returnee Children. In L.Hansen（ed.）*Second Language Attrition in Japanese Context*. New York, Oxford University Press, 80-113.

Yukawa,E.（1998）*L1 Japanese Attrition and Regaining*. Tokyo, Kuroshio.

（博士後期課程学生）

（2009年 8 月20日受付）
（2009年10月 1 日修正版受付）
（2009年11月 2 日再修正版受付）
（2009年11月23日再々修正版受付）
（2009年11月27日掲載決定）